

最近の活動の状況

◇電話相談◇

子どもの虐待防止ホットライン 2019年10月1日～12月19日 電話相談報告（速報値）

① 受信件数 158件

<内訳>

1) 相談者性別・年代

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	不明	合計
女性	1	4	7	29	28	8	10	87
男性	1	0	0	56	3	4	5	69

性別不明 2件

2) 利用回数

初回	継続	不明
47	108	3

3) 相談時間

～9	～19	～29	～39	～49	～59	60分以上
15	20	57	28	19	13	6

4) 被虐待経験の有無

あり	なし	不明
113	5	40

② 内容別件数

虐待（含む危惧）	14
18歳以上の虐待	86
育児不安	10
マスコミ・問合せ	6
その他の相談	40
無言・ノイズ	1
妊娠・出産	1

虐待の型

身体的	心理的	ネグレクト	性的	不明
22	72	2	6	8

編集後記

令和初めての新年を迎えました。CAPNA設立25周年の年となります。ニュースレターも100号に入ります。虐待通報や虐待に悩む親や子どもからの電話相談から始まり、啓発（子ども虐待防止の発信）、DVシェルターの運営、関係機関のネットワークの構築、安全委員会の推進など、CAPNAとしては有意義な25年でした。特別養子縁組の取り組みも愛知県からスタートしたものです。これからは子育て世代包括支援センターの設置、子育て支援（子育て孤立化防止、妊婦支援、養育支援訪問など）、DV被害者・被虐待児への直接支援など、「待つ支援ではなく届ける支援（出前型支援）」ができる体制がCAPNAに期待されていると思います。皆様方の益々のご支援・ご鞭撻をお願いします。（隈元・前島・岩城）

日本子ども虐待防止学会第25回ひょうご大会に参加して

理事 岩城 正光

1 日本子ども虐待防止学会（JaSPCAN）とは

日本で子ども虐待が話題になるようになったのは平成の時代に入ってからでした。それまではアメリカでの児童虐待報道が紹介される程度でした。CAPNAが設立される1年前の平成6年から日本子ども虐待防止研究会が立ち上がり、今日までに25回の学術集会を重ねてきたのです。この学術集会は医学会のような専門家だけの学会ではなく、医療保健・教育・心理・福祉・法律だけでなくボランティアなど地域で児童虐待防止にかかわる人も広く参加できる横断的でオープンなものです。平成12年にはあいち大会が開催され5000人近い参加者がありました。未だにこの参加者数を超える学術集会は現れていません。



平成26年9月には日本で初めての国際児童虐待防止学会が、二度目のあいち大会とともに名古屋国際会議場で開催されました。学術集会を地元で開催することはとても大変な労力が必要であり、とりわけ国際児童虐待防止学会を開催したときCAPNAはこのまま消滅するのではないかと思うくらいに疲弊したことは今でも語り継がれています。

2 ひょうご大会（12月21・22日）に参加してみても

学術集会では様々なシンポジウムや口演発表・ポスター発表があります。2300人くらいの参加者が神戸国際会議場とその隣のホテルの会場に集まりました。私は第一回（東京大会）から今回（ひょうご大会）までのほとんどの学術集会に毎年参加しています。学術集会での発表演題は年々増加し、今では200を超える演題があるのです。もちろん全部を見ることはできません。従って、自分の興味のあるシンポや演題に限定しても7つくらいしか参加できないのです。回を重ねるたびに専門性の高い発表が増えていることにびっくりです。本当にたくましい学術集会であると思います。僕は、今抱えている性的虐待ケースへの対応、法的なテーマである児童虐待と司法関与の問題、子どもの人権にかかわるアドボカシーについての演題を中心に参加しました。名古屋市副市長時代から子どもの貧困問題に取り組んでおり、子どもの人権を具体的に保障するシステムを行政の立場から作っていくべきであるかとの観点から、副市長時代から名古屋子ども未来研究会に参加してイングランドのアドボカシー制度を勉強しています。

CAPNAを設立した当時は、子どものアドボカイトという言葉さえも知りませんでした。その後アドボカイトとは「子どもの気持を代弁する」とことと理解していましたが、今では全く理解が異なります。子どもにかかわる問題について、子どもの意見を代弁するので足りず、子ども自らが直接参画できるシステムこそが重要であることを学びました。とりわけ児童養護施設とか一時保護所のような閉鎖的な施設では、第三者委員会のような組織とは別に子どものアドボカシーを実現・担保できる仕組みが必要なのです。若手の弁護士たちが、アドボカシー実現のために積極的に模索・実践し発表している姿を拝見していると、僕がかかわってきた児童虐待防止活動や付添人活動よりもさらに進化（進歩）しているなあと感慨深いものがあります。さらに大会前日に開催された国際シンポや大会企画で取り上げられた「トラウマインフォームドケア」については、今後の子どものトラウマ理解のためにも必要不可欠な取り組みになるぞと実感しました。

3 学会機関紙「子どもの虐待とネグレクト」の編集委員会に携わって

僕は10年以上JaSPCANの学会誌編集委員をしています。特集号の企画責任者などを担当させていただくことがあります。編集委員会での議論は僕の専門外である有識者の意見が交わされ僕にとって大変に勉強になります。最新号の特集「児童虐待防止における警察・検察・裁判所との関わり」と次号の特集「体罰と虐待」は僕が企画責任者ですが、編集作業に携わりながらとても残念に思うことがあります。それは裁判所の関わり（司法関与）が我が国では遅々として進まないことなのです。米国やドイツなどのヨーロッパでは裁判所（司法）が積極的に児童虐待への対応に深く関わっています。ドイツでは日本という簡易裁判所が家庭裁判所の役割を担っているのですが、裁判所の数や裁判官の数も日本よりも遥かに多いのです。さらに「子どもの人権」についての理解が我が国では不十分であるということです。「子どもの人権」は、日本国憲法で保障されている人権カタログとは全くその人権構造・理解が異なるのです。先日、「子どもの人権を憲法に明記すべきである」と発表をしたことがあります。子ども期における子どもの成長発達を支えるというのは社会権とも異なる新しい人権概念なのです。どの憲法の基本書にも子どもの人権が書かれていません。日弁連では「子ども権利基本法」を作ろうという動きもあります。僕には基本法レベルではすまされない人権構造があることを明らかにする必要があります。いつかCAPNAの研修会でお話しさせていただく機会があれば、お話しさせていただきたいと思います。祖父江さんとともにCAPNAやJaSPCANの設立にも関わりました。わずか25年ですが、子ども虐待防止への取り組みが様々な形に進化していることを実感しています。

「子ども達に笑顔を！」～吉田潤喜氏・名古屋講演会～

副理事長 山本秀樹

ヨシダソース会長、吉田潤喜氏の名古屋講演会が2019年11月6日（水）名古屋今池ガスホールで開催された。吉田潤喜氏は「アメリカのソース王」ヨシダグループ会長兼CEOである。2005年のNewsweek誌日本版では「世界で最も尊敬される日本人100」に選ばれ、2010年にはアメリカと日本の友好に貢献したとして「外務大臣賞」を受賞している。

吉田氏の人生は波乱万丈であった。1949年7人兄弟の末っ子として京都で生まれ、三代続くクリスチャンホームで育ち空手は八段、そしてアメリカにあこがれ1969年に単身渡米し、アメリカ生活をサバイブした末に自家製秘伝のタレをベースにしたヨシダソースの生産販売を成功させた。まさにアメリカン・ドリームの体現者である。現在ではヨシダグループの会長兼CEO、飲料水、レストラン経営、マンション・リゾート開発事業などを展開している。

吉田氏の講演の中ではドネーション(寄付)という言葉がよく聞かれた。こんなエピソードがある。結婚1年後に長女が生まれた。しかし重い病気にかかり緊急入院することになる。病院では5日間5人の専門医がつきっきりで治療し幸い娘は助かった。しかしそんな大変な治療をしてくれたシアトル子供病院が請求した支払額はわずか250ドルだったという。当時は貧乏生活の中、病院がしてくれた貧しい移民への気遣いに感謝し「絶対にこの恩返しをする。そのためにビジネスをしよう。」と心に決めたのだという。

慈善活動への強い意欲はそんな体験からくるのだろう。今でも子供病院ガンリサーチのための寄付や各コミュニティカレッジに通う学生たちの奨学金への寄付が続けられている。吉田氏のそんな慈善活動のテーマが「子ども達に笑顔を！」だ。つまり自分のアメリカン・ドリームは、いろんな人たちの助けがあってこそ実現できたという強い気持ちの表れなのかもしれない。

◇シェルター事業◇ 2019.10-12月末日

	受付先	経路	内容	判断	支援	支援結果
10月	事務局	機関	DVケース	該当	利用せず	使用中
11月	事務局	機関	両親からの虐待	該当	利用せず	他市へ
11月	事務局	機関	DVケース	該当		
11月	事務局	機関	DVケース	該当	利用せず	
11月	事務局	機関	虐待ケース	該当	利用せず	
12月	事務局	機関	DVケース	該当	利用せず	児相へ
12月	事務局	本人	DVケース	該当せず		
12月	事務局	機関	DVケース	該当	利用	使用中

事務局だより

◇2019年度 メール相談事業◇

2019.10.1～12.31（速報値）

月	受信件数
10月	108件
11月	61件
12月	87件

先月JaSPCANひょうご大会に参加しました。児童相談所と警察の情報共有が今後どんどん進むことや子どものアドボケート、養護施設内の性暴力に関するアンケートに関するものなど学び深いものでした。時間の限り参加しましたが、残念ながら気になっても参加できなかった演題が多かったです。

CAPNAは今年活動25年目の年です。これまでの振り返りやこれからのCAPNAがどのように社会貢献できるかを皆さんと共に考えていけたらと思う年にしていきたいと思っています。（兼田・水野）

寄付者一覧（令和元.10～12月31日）

皆様のご支援こそより感謝します。

山本秀樹 小出砂恵子 稲沢福祉まつり 吉田ソース講演会 柴田昇昭・美智子 緑協会 くまの会 萬屋育子 ママネット キシイ チアキ ヒラキ タツアキ 中部ウォーカーソン 正司園美智代 音楽の力 古橋とゆかいな仲間たち パブリックリソース財団 吉田ソース講演会 林 恵美子 原 未子 匿名希望

今回の「吉田潤喜氏・名古屋講演会」でも入り口にCAPNAのブースを作って下さり、講演会参加者全員がオレンジリボンをつけて下さった。そんな吉田氏のドネーション(寄付)にかける熱い思いから、多額の寄付をCAPNAに寄せて下さった。感謝して「子どもの笑顔」のために使わせていただきたい。



吉田潤喜さんとCAPNA理事長小久保さん



関係者・参加者全員で集合写真！

CAPNA チャリティーライブが開催されました！

理事 小出 砂恵子

「音楽の力；古橋とゆかいな仲間たち」のみなさんによるチャリティーライブが11月10日(日)今池ボトムラインにて開催されました。主催者の古橋さんをはじめ地元名古屋で活動されているミュージシャンの方々が、愛や勇気をテーマにしたカバー曲を歌って下さいました。バンドの生演奏の迫力もさることながら、ひとつひとつのフレーズを丁寧に、心を込めて歌い上げるボーカリストの姿に思わず胸がじーんとなりました。また、CAPNAへのチャリティーということで、出演者全員がオレンジリボンを胸に付け、歌の始めには必ず児童虐待について思うことを自分の言葉で表現されており、古橋さん達のチャリティーライブへの取り組みの「半端なさ」に頭が下がる思いでした。私も途中で舞台上に上がらせていただいて、CAPNAという団体の紹介や児童虐待の現状についての説明、そして虐待防止の啓発活動など、古橋さんのご協力により無事責任を果たすことができました。

今回のライブでCAPNAにいただいた寄付は345,436円と聞いています。音楽の力のみなさんやライブを見に来て下さったみなさんのお気持ちを無駄にしないよう、私たちCAPNAは「小さいひとの笑顔のために」いただいたお金を大切に使わせていただきたいと思っています。本当にありがとうございました。



古橋さんとゆかいな仲間たちの皆さんです！



古橋さんと舞台上で活動紹介と虐待について話しました

シェルターは生きている

理事長 小久保 裕美

2019年11月12日に今年も在日米国商工会議所中部支部と名古屋国際学園共催の中部ウォーカーソン活動のなかから、昨年に引き続きシェルター運営に50万円の寄付をいただくことができた。ニュースレター誌上になるが、こころよりお礼を申し上げたいと思います。

CAPNAは、DVから逃れてきた子どもと親等をサポートするため1995年からシェルターを運営している。このシェルターを利用して、DV環境下で苦しんできた母子や女性が、一息ついて、一歩踏み出し、新たな生活を始められる姿を何度か見てきた。母子が入居できるシェルターは貴重な社会資源である。

CAPNAは、非営利団体である。そのため主な財源は会費や寄付金となる。開設した当初は、新しい試みであったため公的な補助金を受けることが出来た。しかし、公的な補助金を継続して受けることは困難である。その後は、様々な団体等に補助金を申請し、寄付をお願いして、ここまで活動を繋いできたといっても過言ではない。あるとき、国の財源を巡って「仕分け」という言葉が使われたことがある。CAPNAでも財源がひっ迫した時に、内部で「仕分け」らしいことがなされた。その時、シェルターが粗上に上ったことがある。とはいえ、シェルターはそのときも死守してきた母子の命と生活を守る貴重な実践活動である。この活動の継続と安定的な財源確保が今後の課題のひとつといえる。



相談員だより

28才で身体の障害を負った。反応性のうつ病に陥り、身が病めば心も病むと身をもって知った。息子たちの為に生きねばと思う一方で、偶然に死ねることを願った。

親身に寄り添う主治医に支えられ多くの人に援けられ生きる希望を取り戻し生きることについて深く考えた。

“地を這うような苦悩の中、寄り添う誰かが居れば生きる力は取り戻せる” 愚直であるが、そう考え自殺予防の社会活動に加わった。その時記した一節で“つらい！ 苦しい！ 死にたい！” 来る日も来る日も慟哭する貴女・貴方と向き合う中「もっと早く貴女に、貴方に出会えていたら」「幼い貴女に、貴方に出会えていたら」と。無力さに思い悩んだ。

必然なのだろう。渦中で苦しむ被害児・加害者への手を差し伸べ「子どもの虐待防止」活動設立を知った。声が掛かった。厳しい研修を経て現場に就いた。「子どもの虐待をなくしたい！」多くの仲間が予防・援助・啓発活動に日々心血を注ぐ。

“揺ぎ無き理念の元で。”

月曜日 G H